

### 【短報】福岡県におけるテラニシセスジゲンゴロウの採集記録

ゲンゴロウ科のテラニシセスジゲンゴロウ *Copelatus teranishii* Kamiya, 1938 は秋田県以西の本州、九州北部（福岡県、大分県、対馬）から記録のあるセスジゲンゴロウ属の一種である（森・北山, 2002）。本種は九州北部では少ない種であり、福岡県レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類（福岡県環境部自然環境課, 2001）、大分県レッドリストでは準絶滅危惧（大分県, 2011）に指定されている。特に福岡県では1941年6月29日の大牟田市からの採集例（関, 1946）以降長らく生息記録がなく、再発見が望まれていた（高倉, 1989；井上・中島, 2009）。しかし、2010年になって環境アセスメント調査報告書上で北九州市から記録され、標本の所在等詳細は不明であるものの、福岡県内での生息が60年ぶりに確認された（北九州市, 2010）。その後、筆者らは福岡県中間市の遠賀川河川敷において本種を複数個体採集したので、生息環境の特徴とともにここに報告する。

♂♂, 4♀♀, 福岡県中間市中島（遠賀川河川敷）, 21. VII. 2011, 中島採集；1♂, 同所, 27. IX. 2011. 秋吉・皆川採集。いずれも中島保管（図1, 2）。

採集地は遠賀川下流域の河川敷に人工的に造成された湿地の一部にある浅い池である（図3）。本湿地は2010年に造成されたばかりであり、それまでは耕作放棄地を中心とする比較的湿潤な草原環境であった。本種は主に岸辺より垂れ下がった植物基質の中や、岸辺の流木の下などの浅い場所から採集された。採集地は下流に位置する取水堰の操作や降雨による影響で水位変動が激しい場所である。同所的にヒ



図3. 採集した環境。

メガムシ *Sternolophus rufipes*, ハイイロチビミズムシ *Micronecta sahlbergii*, クロチビミズムシ *M. orientalis*, アメンボ *Aquarius paludum*, トガリアメンボ *Rhagadotarsus kraepelini* などが多数みられた。

本種の好適生息環境については不明な点が多いが、これまでに薄暗い林中の水溜りで得られた例（大桃, 1989）や、まばらにヨシの生えた所から得られた例（櫻井, 1992）などが知られている。今回の採集地は比較の日当りの良い浅い湿地であるものの、植生がまばらであるなど過去の採集事例と共通する要素も認められる。引き続き本種の生息について知見を集めていきたい。

末筆ながら、北九州市での記録についてご教示いただいた上田恭一郎博士（北九州市立自然史歴史博物館）に厚くお礼申し上げます。

#### 引用文献

- 福岡県環境部自然環境課, 2001. 福岡県の希少野生生物 - 福岡県レッドデータブック 2001-. 447 pp. 福岡県.
- 井上大輔・中島 淳, 2009. 福岡県の水生昆虫図鑑. 195 pp. 株式会社マツモト.
- 北九州市, 2010. 北九州市都市計画道路6号線整備事業環境影響評価書. 北九州市. [http://www.city.kitakyushu.lg.jp/kankyou/file\\_0202.html](http://www.city.kitakyushu.lg.jp/kankyou/file_0202.html) [2012年1月7日参照].
- 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説日本のゲンゴロウ. 231 pp. 文一総合出版.
- 大分県, 2001. レッドデータブックおおいた2011～大分県の絶滅のおそれのある野生生物～. <http://www.pref.oita.jp/10550/reddata2011/index.html> [2012年1月7日参照].
- 大桃定洋, 1989. テラニシセスジゲンゴロウを福岡県で採集. 月刊むし, (226): 5.
- 櫻井俊一, 1992. 鳥海山麓のセスジゲンゴロウ属3種の記録. 月刊むし, (262): 20-21.
- 関 公一, 1946. 鞘翅類雑記 (2). 昆虫世界, 50 (572): 24-26.
- 高倉康男, 1989. 福岡県の甲虫相. 526 pp. 葦書房.

（中島 淳 818-0135 太宰府市向佐野 39

福岡県保健環境研究所)  
 (秋吉彩圭・皆川朋子 814-0180 福岡市城南区  
 七隈 8-19-1 福岡大学工学部)

### 【短報】岡山県北部の積雪地帯における水生甲虫2種の越冬場所について

水生甲虫の越冬についての知見は少なく、越冬場所や越冬態などを解明するためには、記録を蓄積することが重要である。亀澤 (2011) はトダセスジゲンゴロウ *Copelatus nakamurai* (Gueorguiev, 1970) が朽ち木中で確認されたことを、山崎 (1993) はコシマゲンゴロウ *Hydaticus grammicus* (Germar, 1830) が石の下で確認されたことを報告しており、森・北山 (2002) はウスイロシマゲンゴロウ *Hydaticus rhanoides* (Sharp, 1882) の成虫が冬期でも水域で見られるとしている。また、上手 (2002) は北海道の積雪地帯において、キベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis* (Sharp, 1873) は幼虫のみが、マメゲンゴロウ *Agabus japonicus* (Sharp, 1873) やクロズマメゲンゴロウ *Agabus conspicuus* (Sharp, 1873) は成虫と幼虫の両方が冬期に確認されたとしており、その他数種の越冬態や越冬場所について記している。筆者は、岡山県北部の積雪地帯において、水生甲虫の生息調査を行い、同所的に生息しているホソクロマメゲンゴロウ *Platambus optatus* (Sharp, 1884) とキベリヒラタガムシ *Enochrus japonicus* (Sharp, 1873) の成虫越冬を確認した。積雪地帯における両種の知見は特に少ないと思われるので、ここに報告する。

今回調査を行った湿地のある「津黒いきものふれあいの里」は、岡山県の最北部、中国山地の脊梁部にあり、標高およそ 580m、過去 10 年間 (2002 ~ 2011 年) の年間降雪量の平均値 517.5cm (気象庁「過去の気象データ」, <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>, 2012 年 2 月 1 日確認) の積雪地帯である。同施設は湯原奥津県立自然公園に含まれており、岡山県自然保護条例に基づく「郷土自然保護地域」に指定されている。今回調査を行った湿地も同ふれあいの里内に位置しており、捕獲や採集が禁止されているが、今回の調査は許可を得たうえで捕獲を行い、同定した後、全て放虫した (ホソクロマメゲンゴロウの同定には交尾器の比較が必要であるが、この湿地には本種しか生息していない)。調査地である湿地は約 9.2m<sup>2</sup> (1.3 m × 7.1 m) で、山の染み出し水が溜まりになっており、通年水が絶えることはない。

調査は、降雪開始日の 2011 年 12 月 9 日 (気象庁「過去の気象データ」, <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>, 2012 年 2 月 1 日確認) から約 1 ヶ月半経過した 2012 年 1 月 31 日に行った。水中はたも網を用いた掬い採りを行い、それ以外には土の上を覆っている雪を取り除き、手作業で水際側から土を少しずつ削り、目視で探した。その際、土の上に積もっている雪の高さ、水と土の接面から発見された箇所までの距離を測定した。

その結果、水中での掬い採りでは確認することができなかったが、土中からはホソクロマメゲンゴロウとキベリヒラタガムシの 2 種を確認することができた (図 1, 図 2)。確認されたホソクロマメゲンゴロウ約 10 個体、キベリヒラタガムシ約 20 個体は全て成虫であった。2 種が確認されたのは、湿地の水が浸透している極めて湿潤な部分であった (図 3)。この部分では、土が柔らかく、落ち葉などの大きなものや、細かなデトリタスが複雑に混じり合い、微小な隙間が多く見られた。このような環境は水中か陸地かの判断が難しいが、水面から約 15 cm 以内に限られ、それ以上掘り進んだ硬い土の部分からは両種共に得られなかった。一方、同じように湿地の水が浸透していても、主に



図1. 越冬中のホソクロマメゲンゴロウ。

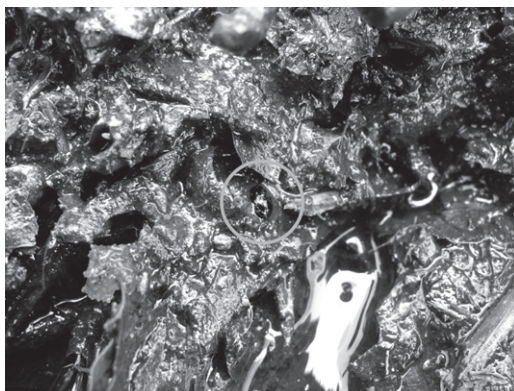


図2. 越冬中のキベリヒラタガムシ。